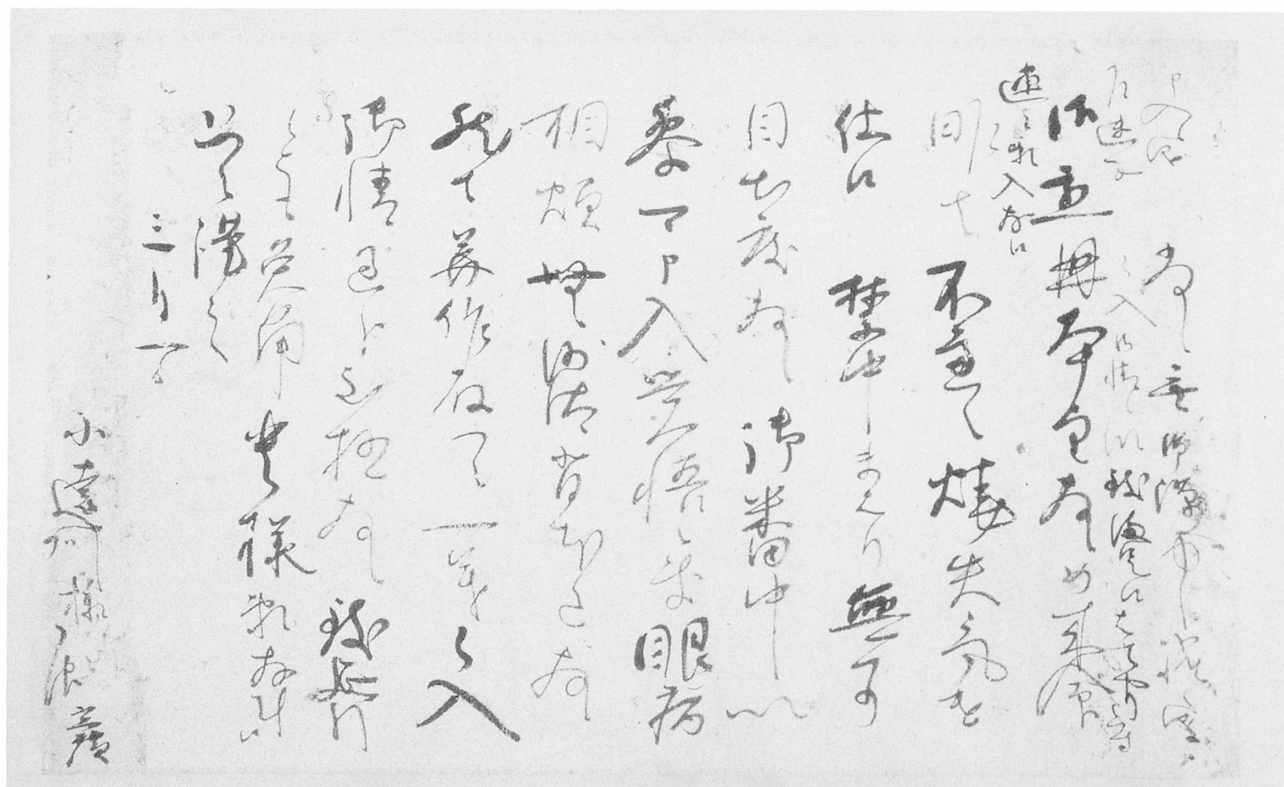


# 六<sup>む</sup>連<sup>れん</sup>銭<sup>せん</sup>

第4号



烏丸光廣書状

(真田宝物館蔵「古文書」より)

# 企画展「善光寺地震」を開催して

平成一〇年度の企画展示として、「善光寺地震」松代藩の被害と対応」を、一月二日から二月七日まで、真田宝物館と象山記念館において開催しました。

善光寺地震とは、今から一五一年前に起こった地震で、現在の長野県北部はおおきな被害をうけました。殊に、松代藩領の被害は甚大で、災害の様相も多様でした。地震による建物の倒壊などによる直接的な被害のほか、火災や山崩れ、土石流・洪水による被害などがありました。こうした災害を経験した私たちの祖先は、この大災害をどのように受け止め、そしてどのように対処していったのか、これが今回の展示の主眼です。

真田宝物館では、善光寺地震に関する諸資料を、地震の経過を中心にした通史的な展示と、絵画や記録として残された善光寺地震像と、大きく二つに分けて展示しました。象山記念館では、主に災害情報の伝達という意味で、かわら版類を多く集め展示しました。また、善光寺地震を教訓としてどう生かしたかを、佐久間象山と渡辺敏という二人の人物を通して展示しました。

善光寺地震に関する資料は膨大で、そのうえ多種多様です。しかし、これらの

多くの資料は、善光寺地震がどのような災害であったかを示す資料としてしか今まで扱われてきませんでした。また震災の後、人々がどのように生活をもとのように復興していったのかといった視点も欠けていました。この震災後の復興ということは、先ごろ起こった、阪神・淡路大震災の後のさまざまな報道などによって、多くの人々の関心を呼びました。

善光寺地震を検討するということは、単に地震の悲惨さを書き記すことではなく、そこに生きた人々の震災後の生き生きとした姿を逆に浮かび上がらせるのです。今回の展示が、既成の善光寺地震像を継承しつつも、新たな局面にむけた意識変革のきっかけとなることを期待したいと思います。

この展示に合わせて、一月三日にはシンポジウム「善光寺地震」災害を科学する試みをたどる」を開催しました。この日は文化の日で、各地で多くの催しがあったのにもかかわらず、一五〇人弱の参加者を得ました。

報告は、赤羽貞幸先生（信州大学）の「善光寺地震と土砂災害」、北原系子先生（東洋大学）の「善光寺地震の災害情報」、影山純夫先生（神戸大学）の「画

家と地震」雪卿を中心に」。そして東徹先生（大阪府教育センター）の「佐久間象山と善光寺地震」の四人の先生方からいただきました。善光寺地震を、地質学・歴史学・美術史・科学史という違った視点から描き出そうという試みでした。

このような企画展示・シンポジウムは、当所にあつては初めての試みとなります。この企画には四人の先生方からの多くのご協力がありました。こうしたご助力があつてこそ初めての試みながら開催にこぎつけることができたのです。

従来、真田宝物館というと、武士の精神を象徴するような、甲冑や刀がところせましと並べられているという印象がありました。しかし、真田宝物館が所蔵する真田家の大名道具は、少し手を加えてあげると多くの情報が出せるものばかりです。今回は善光寺地震という視点を与え、その中から真田家大名道具（古文書を含む）に語らせていただきます。大名家に残る資料は、さまざまな解釈を施してあげると、ひとりでに語りはじめるのです。

今回の展示は、真田宝物館にとつてはきわめて冒険的でした。しかし、開館以来三〇年になろうとする施設ですから、今までのマンネリ化を打破し、新しい試みを更に続けなくてはならないのではないのでしょうか。広く市民が憩い学べる場への変革はこれからです。



シンポジウムの様子

# 松代文化財ボランティアの活動

松代藩文化施設管理事務所では、平成九年度に、文化庁の「文化財愛護活動推進方策研究委嘱」をうけました。この研究委嘱で、当所では「松代文化財ボランティア」の養成を開始し現在に至っています。この活動につきましては、『文化庁月報』No.三五九(平成一〇年八月)に詳しく記されています。重複する部分もありますが、ひとまず活動のあらましをご紹介致します。

長野市松代町は、真田家一〇万石の城下町として多くの人々に知られています。ただ、それでは城下町を示すものは何かと聞かれた場合、答えに苦慮するのではないのでしょうか。松代の観光拠点は真田宝物館です。しかし、真田宝物館での展示は、あくまでも真田家の大名道具であり、城下町の展示は一切していません。こうした意味で、真田宝物館は松代の観光拠点ではあっても、城下町の文化を代表するものではないということになります。ひとたび町に出ると、非常に多くの城下町の面影に触れることができます。数多い寺院・神社、江戸時代以来手が加えられていない道、さまざまな門、それに、何といっても多くの庭園があります。これらは、あまり知られてきませんでし

た。

また松代の特徴は、何といっても文化財の宝庫であるということですが、古くは古墳から明治以降の製糸業をはじめとする産業遺跡など、各時代を代表する文化遺産が非常に多く存在しているのです。こうしたことから、養成講座では、単に真田宝物館の展示解説のできる人の養成にとどまらず、広く松代の文化財全般を紹介できる人材の育成に主眼を置きました。

平成九年一二月に事業を開始し、実に八〇名ほどの人々の賛同を得ました。地元で居ながら松代のことをよく知らないので学びたいという人々が多くいます。養成講座の内容を列記すると次のようになります。

## 平成九年一二月

発会式および松代藩文化施設管理事務所の見学

## 平成一〇年一月

松代の街を歩いてみよう

## 二月

講演会 「真田家と武田家」

講師 笹本正治先生(信州大学)

## 三月

講演会 「松代の清滝観音について」

講師 牛山佳幸先生(信州大学)

## 四月

講演会 「南木曾町・妻籠宿の保存」

講師 遠山高志先生

(南木曾町立歴史博物館副館長)

## 五月

見学会 「長野県立歴史館の機能」

## 六月

講座 「真田家文書について」

講師 原田和彦

(当所学芸員)

## 七月

講座 「真田宝物館所蔵の真田家資料について」

講師 原田和彦

(当所学芸員)

## 八月

見学会 「長野市松代町西条周辺の文化財」

見学先 西楽寺・清水寺・六

工社跡・開善寺経蔵

九月

講座 「真田家の刀剣について」

講師 峰村竹三先生

講座 「真田家の絵画」

講師 原田和彦

(当所学芸員)

見学会 「松代の街を歩いてみよう」

講師 原田和彦

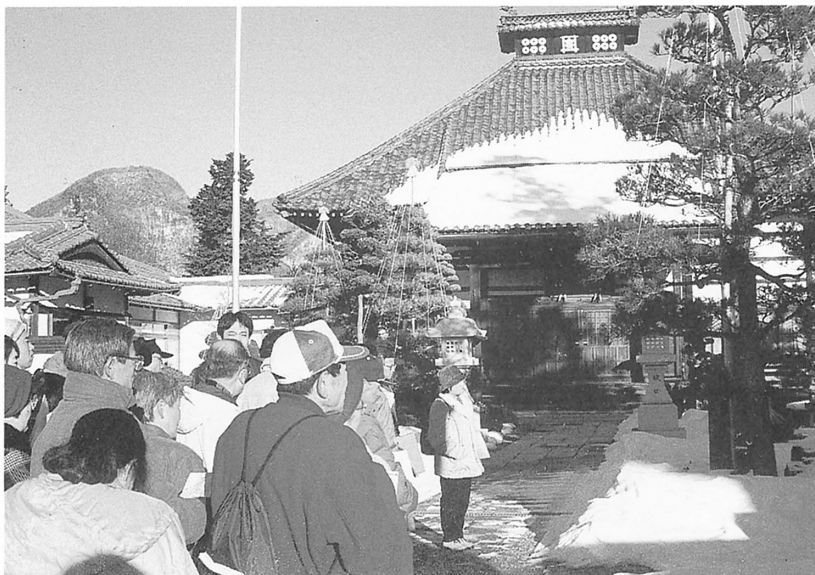
(当所学芸員)

## 一二月

シンポジウム 「善光寺地震」

見学会 「企画展・善光寺地震」

こうした養成講座を通じて、幅広い知識を習得していただいて、次年度以降に試行的にボランティア活動を始めたいと思います。



見学会「松代の街を歩いてみよう」

# 資料紹介「古文書」

表紙の写真は、烏丸光廣が小堀遠州(守一)にあてた文書です。小堀遠州のもとへ向かうことが叶わないことを詫びる内容となっています。

この文書の真偽はともかく、本書状は「古文書一巻」と書かれた題箋のついた卷子のなかに納められている一点です。

この「古文書」という卷子は二巻存在し、さまざまな古文書が収録されています。すでに、米山一政編『真田家文書下巻』に所収されています。烏丸光廣の書状から始まる巻は、『同書』三〇一頁から三四三頁までに納められていますし、もう一方の、織田信長朱印状から始まる巻は『同書』の三四四頁から三八二頁に納められています。

従来、この文書群については、「真田家文書」の一部であると理解されてきました。しかし、これは正しくありません。また、東京大学史料編纂所が調査・写真撮影した際、この文書群に対して、「小川文書」という名称を与えています。東京大学史料編纂所はこの調査にあたって、真田家が従来から伝えてきた真田家文書

と性格が違うと理解してのことでしょう。ただ、本当に小川家に伝わったものかといえはその根拠もなく、確かに小川宛ての書状は数点確認されるものの小川家が伝えた文書群であるとは、その宛所をみても疑問があります。

そもそも、この「古文書」二巻は、真田家の道具目録のなかでは、明治一三年の巻物目録(真田家が国立史料巻に寄託している文書)の「丁印」分類のなかに、「一古文書 二箱入二巻」とあります。

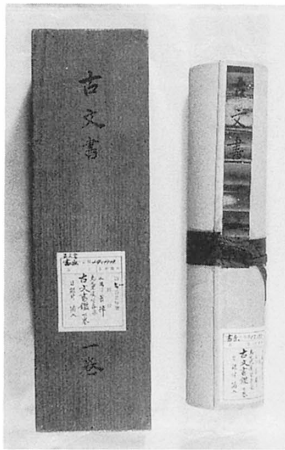
これより前の目録にこの「古文書」の記載があるかは検討していませんが、少なくとも明治の初めには真田家の所蔵であったことが確認されます。また、この巻物目録は、すでに『真田宝物館収蔵品目録(1)』で検討したように、ここに収録されている絵画・墨跡類は、近世大名・真田家の道具として伝来してきたものの整理目録と考えられるので、江戸時代以来の伝来の可能性が高いと思われます。

では、だれがこの「古文書」を収集したのでしょうか。そもそも、江戸時代には、こうした古文書の収集が大名の間で

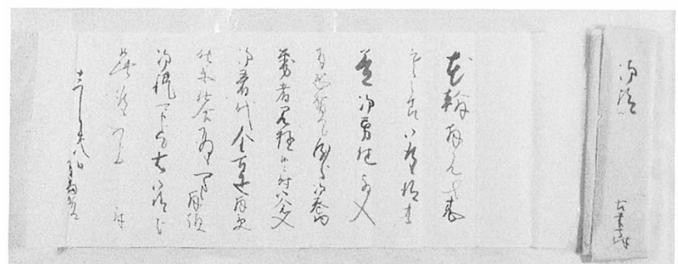
も盛んに行われていました。真田家との関係では、八代藩主・幸貫の父である松平定信は古文書集をつくったことでも有名です。また、幸貫は父の業績を追随するような行動が多く、とすれば、「古文書」二巻の収集は、八代藩主の頃である可能性が高くなります。このほか、幸貫の子・幸良は蔵書家で、「有斐亭」という文庫を作る人物です。もしかすると、こうした人々によって集められたのではないのでしょうか。

従来、古文書はその善し悪しや歴史叙述の世界でのみ扱われてきました。しかし、江戸時代のように、嗜好品として古文書を集めるということも認識する必要があると、美術品収集という視点を加味しながら考えていく必要があるでしょう。

(原田和彦)



「古文書」の装丁と収納箱



「古文書」について、

古筆家からの文書

松代藩文化施設管理事務所だより

六連銭 第四号

1998年12月30日発行

編集・発行 松代藩文化施設管理事務所

☎3811231

長野市松代町松代4-1

☎〇二六二七八―二八〇一